

## ながさきいせき 6 長崎遺跡（6区）

所在地：坂井市丸岡町長崎

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港

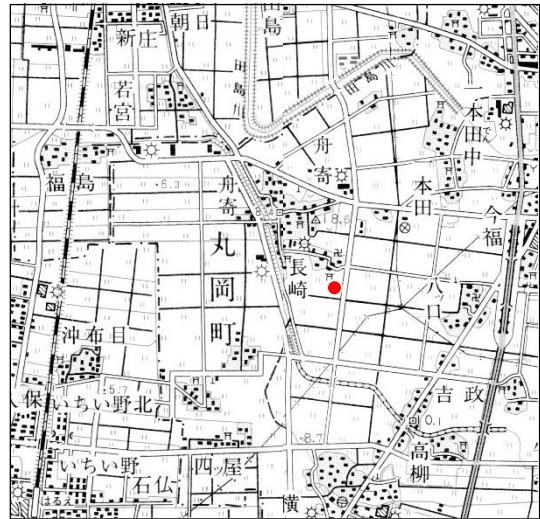
丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和4年4月～9月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：3,280 m<sup>2</sup>

時代：中世



位置図（S=1/50,000）

**遺跡について** 長崎遺跡は、丸岡の町の西側、兵庫川の東岸にあります。鎌倉時代後半から室町時代にかけて、称念寺<sup>しょうねんじ</sup>を中心に、多くの人びとが住む町が広がっていました。また、戦国時代には、朝倉氏の有力拠点の一つにもなっていました。

**主な遺構** 長崎の町の様子を知るうえで、多くの手がかりが見つかりました。

14世紀になって、北側に東西方向の大きな溝（北側大溝）がつけられました。これは、町の中と外とを区切るための溝だと考えられます。また、北側大溝のすぐ北に、当時の河川から称念寺付近に舟で入るための溝（舟入状遺構<sup>ふないりじょう</sup>）がつけられました。南側でも大きな溝（南側大溝）がつけられ、中間にも小さな溝が3つつけられました。

しばらくたってから、大溝のまわり以外、全体が平らに整地されます。その時期については、14世紀中かそれとも15世紀なのか、現段階でははっきりしていません。

16世紀以降は、ふたたび整地され、北側に小ぶりの溝がいくつかが掘られました。また、北西隅近くに、井戸が掘られました。一方、南北の大溝はかなり埋まり、建物などの遺構もほとんどありません。町の中心は、西側に移っていったと考えられます。

**主な遺物** 長崎の町が大いに栄えたことを示す、さまざまな遺物が見つかりました。

〔陶磁器・土器〕 中国から運ばれてきた青磁<sup>せいじ</sup>や白磁<sup>はくじ</sup>の破片が多数出土しました。古瀬戸<sup>せと</sup>や珠洲焼<sup>すずやき</sup>といった日本列島内の製品、越前焼<sup>かめ</sup>の甕やすりばちも多数出土しています。中世の長崎の町は、日本海を通じて東アジア全体にまでネットワークを広げる、地域の経済や交流の中心だったのです。そして、お茶をわかす道具（瓦質風炉<sup>がしつふうろ</sup>）や、貴重な褐釉茶入<sup>かつゆうちやいれ</sup>の破片も出土しました。中世の茶文化を示す、重要な資料です。

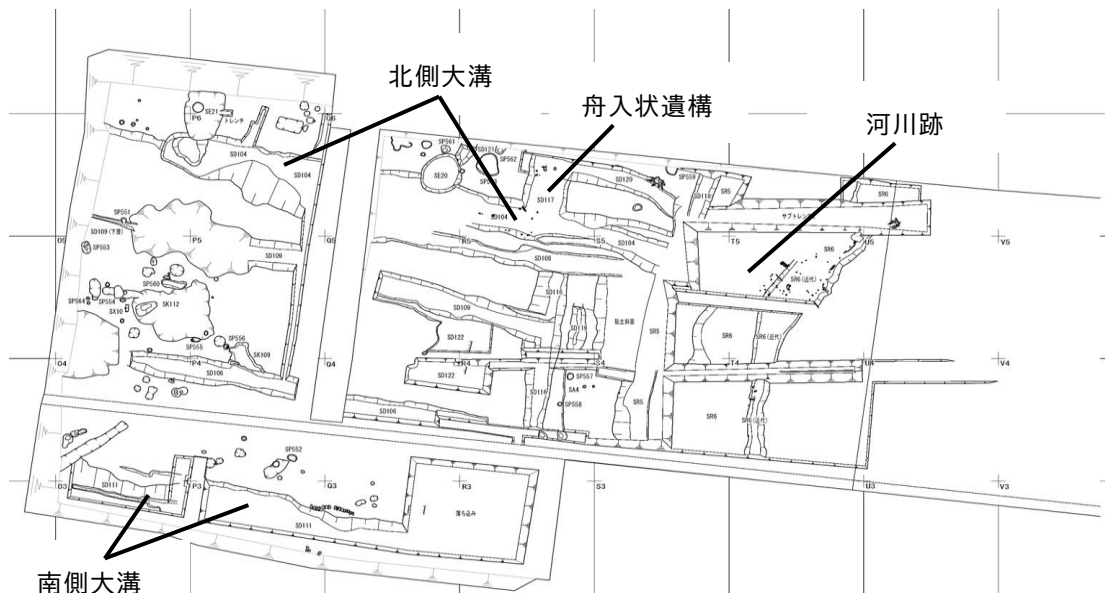
〔漆器・木器〕 漆塗りの椀や皿などが出土しました。とても細かい紋様のあるものもあります。また、<sup>かい</sup>櫛・<sup>まげもの</sup>曲物底板・<sup>はきもの</sup>はきもの・<sup>さや</sup>刀の鞘といった木器、さらには文字が書かれた<sup>にふた</sup>荷札と考えられる木器も出土しました。当時のくらしがよくわかります。

〔石製品〕 バンドコ（<sup>あんか</sup>行火）などが出土しました。つくりかけのものもあります。

〔青銅・鉄製品〕 仏具の<sup>わん</sup>鉢や釘、束になった<sup>どうせん</sup>銅銭、<sup>つち</sup>鋸や<sup>こつか</sup>小柄が出土しました。

**まとめ** 中世の越前の社会や文化を考える上で、多くのあらたな発見がありました。室町時代前半の出土品が多く見つかった点も重要です。かつて坂井平野で大いに栄えた長崎の町の歴史をさらに調べていくことで、いろいろなことがわかりそうです。

（魚津知克）



遺構全体図（第2面：14世紀ごろ）



称念寺と調査区（南方上空から）



舟入状遺構（南西から）